

國學院大學學術情報リポジトリ

平安朝物語にみる渡海譚の様相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): 『竹取物語』, 『浜松中納言物語』, 『とりかへばや物語』, 『大鏡』, 平安朝物語, 渡海譚 キーワード (En): The Tale of the Bamboo Cutter , Hamamatsu Chunagon Monogatari , Torikaebaya Monogatari, The Great Mirror , Heian-period Stories , Sea-crossing Tales 作成者: 周, 維維 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001637

平安朝物語にみる渡海譚の様相

The Various Aspects of the Sea-crossing Tales in Heian-period Stories

周 維 維

キーワード：『竹取物語』『浜松中納言物語』『とりかへばや物語』『大鏡』

平安朝物語 渡海譚

Key Words: *The Tale of the Bamboo Cutter Hamamatsu Chunagon Monogatari Torikaebaya Monogatari The Great Mirror Heian-period Stories Sea-crossing Tales*

要旨

渡海譚は人々が意志的に海を渡る途中で経験する出来事や、海を渡るために行う行動を描く一連の話である。日本、ないし世界中においてもよく見られるテーマであるが、それを集中して論じた研究が比較的少ない。本稿は渡海譚の内実およびそれと関する研究を説明した上で、平安朝物語の『竹取物語』『浜松中納言物語』『とりかへばや物語』『大鏡』にみえる渡海譚を取り上げ、虚構と真実・昔話と実話・夢と現実という交錯するその様相について分析してみた。これらの渡海譚は歴史上の実際の渡海経験を背景に持ちながら、時々伝承関係、社会信仰を反映し、独自の渡海譚として発展してきたと考えられる。

Abstract

The sea-crossing tales are a series of stories that depict the events people experienced while intentionally crossing the sea, or the actions taken to cross the sea. Although it is a common theme in Japan and even around the world, there have been relatively few studies that focus on it. This paper firstly explained the substance and research on the sea-crossing tales. And then examined the sea-crossing tales found in Heian-period stories, trying to analyze their various aspects, which intertwined fiction and truth, folk tales and the real tales, dreams and reality. These sea-crossing tales have a background of actual sea-crossing experiences in history, and develop into unique tales, which sometimes even reflect the traditional relationships and social beliefs.

はじめに

島国である日本は古くから交通往来および文化交流などを行うために、渡海はどうしても避けられない肝心な話題である。古代日本の史料、僧侶の旅行記には荒海を横断する人々の姿が記されている。特に遣外使節の派遣にも加えて、大海

を渡る使節および僧侶の物語が平安文学にも織り込まれる。実際、平安文学だけではなく、上代から近世に至るまでの日本古典文学にも渡海譚の痕跡が見られる。鈴木彰氏、鈴木弘道氏、丁莉氏、張永維氏をはじめとする研究者は渡海譚の存在、および平安文学に見る渡海譚に触れたが、全体的に言えば渡海譚の研究が断片的で、集約されていない。ゆえに、本稿は渡海譚に関する議題を説明し、平安朝物語の『竹取物語』『浜松中納言物語』『とりかへばや物語』『大鏡』における渡海譚を捉え、それらの様相を説明してみたい。

一、渡海譚の内実およびそれに関する研究

本論を始める前に、渡海譚の内実を明らかにしなければならない。鈴木彰氏は「渡海記」を「第一義的には、ある目的のもとで意志的に海を渡って異国・異郷を訪ねた、あるいは訪ねようとした人々、また、図らずもそうした状況に追い込まれてしまった人々によって著された体験記・見聞記ということになろう」⁽¹⁾と定義づけている。それは渡海記の定義であるが、渡海譚とかなり近い。丁莉氏は渡海譚の言い方を用いたが、それについての説明は見られない。そもそも「譚」は物語、話の意味であるから、渡海にまつわる何かのストーリーの展開が含まれるのも当然であろう。それを考慮に入れて、広義的な渡海譚は航海譚、漂流譚を含むすべての海上体験に関する話が包括されるが、狭義的な渡海譚は人々が意志的に海を渡る途中で経験する出来事や、海を渡るために行う行動を描く一連の話を指すのであろう。この場合、焦点は渡海の行為が成し遂げるか否かにあると思われる。本論はこの狭義的な渡海譚に基づいて展開していきたい。

人類は海に対して複雑な感情を抱いている。海の恵みに感謝する一方で、荒海に吞まれて命を落とすことへの恐怖も強く身に沁みる。この複雑な感情がやがて海を征服しようとする意欲を掻き立てる要因ともなった。渡海譚は海を征服する一環として、世界中で普遍的なテーマと見なされるようになったのである。

すでに古代ギリシア叙事詩『オデュッセイア』巻五に渡海譚の痕跡が見られる。オデュッセウスは海神ポセイドンを怒らせて、海で様々な辛酸を嘗め、やむを

(1) 鈴木彰、「渡海記と漂流記——十六世紀以前を中心に」、『東アジア文化講座第一巻はじめに 交流ありき 東アジアの文学と異文化交流』、文学通信、2020年、pp35-47。

得ず神に祈って、ようやく河口に入って上陸した話は渡海譚の一例と見なしてもよからう。⁽²⁾ 同じくギリシア神話の『アルゴナウティカ』巻二には、英雄らがボスポラス海峡で預言者フィネウスのから、海中に聳え立った打合いの岩を通過する方法を得て、無事に通り抜け、海を渡ったことが詠じられる。⁽³⁾ 中世の航海冒険作品『聖ブレンダンの航海』には、まるで凍りついたかのようにってしまった海で二十日間を過ごし、ようやく神の力で航行できた話も渡海譚に属する。⁽⁴⁾

宗教經典において、逆風で波に悩まされていた弟子らと全く反対するイエスは海の上を歩いて、弟子らのところに向かったというイエスの神力を示す渡海譚は『聖書』に収められる。⁽⁵⁾ 仏教では黒風海難と羅刹鬼難に遭う商人らが馬王に救われて成功に渡海できた話⁽⁶⁾、商人らが渡海する途中で海中の摩羯魚と遭遇し、危険な状況で仏を称念して助かった話⁽⁷⁾、商主が渡海する途中で水羅刹に捕らわれて神に祈請するところ、大亀が現れて渡海を助けた話⁽⁸⁾も渡海譚だと考えられる。

中国では「八仙過海」の民間伝説で、呂洞賓をはじめとする八位の神仙がそれぞれの異能と特技を用いて東海を渡ることがよく知られている。⁽⁹⁾ さらに少数民族として、瑶族の先祖らは旱魃から逃れて海辺に至り、渡海する時に波風に翻弄されて盤王に祈って成功に渡海する話が挙げられる。⁽¹⁰⁾ 漢籍で渡海の例として、『南史』「劉穆之伝」で劉穆之は宋武帝と海を渡り、二頭の白竜が船を挟むのを夢

(2) Translated by Robert Fagles, Homer. *The Odyssey*. Viking Adult, 1996, pp165-166.

(3) Translated by Peter Green, Apollonios Rhodios. *The Argonautika*. University of California press, 2007, pp93-95.

(4) 太古隆治, 「聖ブレンダンの航海(2)」, 『広島大学フランス文学研究』第23号, 2004年, pp48-71。

(5) 『聖書』「マタイによる福音書」第十四章。

(6) 『承事勝己経』「師子有智免羅刹女」(『経律異相』卷第四十三)、「増一阿含経」卷四十一「馬王品第四十五」, 『仏本行集経』卷第四十九「五百比丘因縁品第五十」, 『法苑珠林』卷三十一、妖怪篇第二十四述意部、「根本説一切有部毘奈耶」卷第四十七、四十八などに見られ、類話として『大唐西域記』卷十一「僧伽羅伝説」がある。

(7) 『衆経撰雜譬喻経』卷下第二十五話、「法苑珠林」卷三十四「摂念篇」第二十八と「引証部」第二、「経律異相」卷第四十三「五百賈人値摩羯魚称仏獲免十五」に見られ、類話として『大唐西域記』卷八に摩揭陀国の話がある。

(8) 『維宝蔵経』卷三「有_一一大亀_一、背_一广一里_一、心生_一悲愍_一、来_一向_一船所_一、負載_一众人_一、即得_一渡海_一」とある。高楠順次郎等編, 『大正新脩大蔵経』第四冊, 大正一切経刊行会, 1924年, P464。

(9) 雑劇『争玉板八仙過滄海』、(明) 呉元泰撰『東遊記』第四十八回などに見られる。

(10) 過山榜編輯組, 『瑶族「過山榜」選編』, 湖南人民出版社, 1984年, P89。

見たこと⁽¹¹⁾、『拾遺記』巻二で禹は大海を渡る時に大亀と鰐が橋となしたことがある。⁽¹²⁾ 渡海とかなり近い渡河のテーマとして、『史記』「秦始皇本紀」で、長江で大風に遭い、渡河できない始皇帝は湘山の樹木を伐る命令を下ろした話⁽¹³⁾、また『呂氏春秋』「恃君覽」に記されている大禹の渡河⁽¹⁴⁾、『論衡』「吉驗篇」に見える東明王朱蒙の渡河がその例である。⁽¹⁵⁾

以上からみると、渡海譚は確かに世界中においても共通的な話題である。古代日本も大陸から文化摂取および文化交流のために、命を惜しまずに渡海の旅に立った人々の姿が歴史書、文学作品に描かれている。

これに関する研究を整理してみた。小林月史氏は日本における渡海思想を仏教と神道に置き、それを宗教的な視野から論じており、渡海神社、「渡海文殊図」、行基菩薩、弁財天などの神仏と渡海の関わりを述べている。⁽¹⁶⁾ 渡海譚と近い渡海記に特別な関心を寄せているのは鈴木彰氏である。氏は文芸な視野から渡海と接触しており、特に中世文学に描く渡海記は実際の洋上体験に基づき、近世の漂流記が中世以来の表現の経脈に連なっていることを指摘している。⁽¹⁷⁾ 氏はまた文化的な視野で日本歴史上の渡海記と漂流記を提示し、日本古典文学における渡海譚および絵巻に描かれた渡海図にも注意を払い、「渡海記」と「漂流記」研究への展望をも語っている。⁽¹⁸⁾ 他に典型的な渡海譚研究として、弟橘比売命の入水伝説、「補陀落渡海」、「天竺徳兵衛」渡海譚、近世の渡海日記、漂流記における渡海譚などが挙げられる。しかし、全体的に言えば、渡海譚についての研究は断片的で、集約的になっておらず、その構造、伝承、特色、意義を取る研究が欠けていると

(11) 「嘗夢與宋武帝泛海遇大風、驚俯視船下、見二白龍挾船。既而至一山、山峰聳秀、意甚悅」。李延寿撰、『南史』（第二冊）、中華書局、2012年、P423。

(12) 「濟巨海則鼃鼃而為梁、逾翠岑則神龍而為馭」。王興芳訳注、『拾遺記』、中華書局、2019年、P61。

(13) 「逢大風、几不得渡。（中略）于是始皇大怒、使形徒三千人皆伐湘山樹、赭其山下」。二十四史精裝版『史記』第一冊、中華書局、2013年、P248。

(14) 「禹南省、方濟乎江、黃龍負舟。舟中之人、五色無主」。呂不韋撰、陳奇猷校訳、『呂氏春秋新校釈』、上海古籍出版社、2002年、P1355。

(15) 「東明走、南至掩淩水、以弓擊水、魚鼃浮為橋、東明得渡。魚鼃解散、追兵不得渡」。楊宝忠、『論衡校箋』上、河北教育出版社、1999年、P65。

(16) 小林月史、『渡海思想について』、京都観照会事務局、1980年。

(17) 鈴木彰、「文芸としての渡海記・漂流記——海と海域をめぐる表現の系脈——」、『淵民學志』(24)、2015年、pp39-63。

(18) 鈴木彰、「渡海記と漂流記——十六世紀以前を中心に」、『東アジア文化講座第一巻はじめに交流ありき 東アジアの文学と異文化交流』、文学通信、2020年、pp35-47。

思われる。

本論に論じる平安朝物語に見える渡海譚について、丁莉氏は『竹取物語』に見える二つの渡海譚に注目し、それは遣唐使船や商船など実際の航海の様々な苦難や体験を反映し、背景としてしていると説明し、『うつは物語』『浜松中納言物語』『松浦宮物語』における渡海譚の存在を述べている。⁽¹⁹⁾ 鈴木弘道氏は『浜松中納言物語』と『とりかへばや物語』に見える「させまろ」渡海伝説の出典に着目している。⁽²⁰⁾ 張永維氏は『浜松中納言物語』における唐後の渡海の際に現れた海の龍王、「させまろ」の渡海伝説に触れる。⁽²¹⁾ 拙稿もいくつか唐後の渡海に関する点を述べている。⁽²²⁾ 本論はそれらの先行研究を踏まえて、平安朝の物語における渡海譚の様相を考察してみたい。

二、虚構と真実の間——『竹取物語』を例として

『竹取物語』に二つの渡海譚がある。まずはくらしの皇子の偽渡海譚で、もう一つは大納言大伴御行の実際の渡海譚である。

計謀に秀でたくらしの皇子はかぐや姫から「蓬莱の玉の枝」の難題をもらった後、偽りの宝物と航行経験を計画していた。くらしの皇子によると、彼は蓬莱の山に向かった渡海の途中で、大波に遭遇し海の底に沈みそうとなり、風で未知の国に吹かれて鬼のようなものに殺そうとし、海で方向を失い、食糧不足で海島の草の根を食物とし、恐ろしい怪物が彼を呑み込もうとし、海の貝を拾い命をつなぎ、旅で病氣したなど色々なことを経験した。その偽渡海譚の海外出航は遣渤海使もしくは送渤海使、また遣唐使や商船など実際の航海を典拠とし、反映していることがすでに述べられている。⁽²³⁾ くらしの皇子の偽渡海譚は実に入念に

-
- (19) 丁莉、「『竹取物語』に読む古代アジアの文化圏」、『東アジアの文化圏』、笠間書院、2017年、pp28-47。
 (20) 鈴木弘道、「浜松・とりかへばや所載「させまろ」の伝説」に関する考察」、『国語と国文学』30(7)、1953年、pp24-33。
 (21) 張永維、「異界譚の視座から見られる『浜松中納言物語』の河陽県の後」、『学芸国語国文学』第55号、2023年、pp107-115。
 (22) 周維維、「『浜松中納言物語』における唐後の渡海について」、『東アジア文化研究』第十号、2024年、pp63-74。
 (23) 神尾暢子、「暦日規定の表現映像」『初期物語文学の意識』、笠間書院、1979年、pp7-17。丁莉、「『竹取物語』に読む古代アジアの文化圏」、『東アジアの文化圏』、笠間書院、2017年、pp28-47。

設計されたもので、大風・荒波・漂流・異界・怪人・迷路・食糧不足・怪物・病気など海中で危険とされる様々な要素が備わっている。これらの要素を巧みに扱うには、航海経験あるいは航海史実に詳しい人物によると思われる。これはくらしの皇子が想像上の海旅であるが、あまりにも生き生きとした経験で、翁もそれを信じ込んでいた。

その中に、「ある時には、風につけて知らぬ国にふき寄せられて、鬼のやうなるもので来て、殺さむとしき」という、風に吹かれて未知の国に至り、鬼のやうなものに殺されそうになることは仏經における羅刹国伝説を想起させる。前も少し触れたが、羅刹国伝説は『増一阿含經』『仏本行集經』など仏經における古インド文化に影響された海難・異界譚である。具体的に言うと、それは商人らが宝物探しに海に出て、悪風・黒風に吹かれて、羅刹国に到着し、その羅刹女に食われようとし、馬王の助けで脱出した構成である。仏經における海上での異界譚として知られている。また、「ある時は、いはむ方なくむくつけける物来て、食ひかからむとしき」という、言いようもない気味悪い妖怪が現れ、くらしの皇子を喰いかかろうとするものも仏經における摩竭魚を思い浮かべる。摩竭魚は空想上の海に住む巨大な怪魚である。『衆經撰雜譬喻經』によると、商人らは乗船して宝物探しに入海する時に摩竭大魚に当たり、大魚が頭を出して衆生を飲もうとした。その時、衆生皆は旧信仰を捨て、一心に仏教にすがり、釈迦の御名を念じて摩竭大魚を感化させ、存命できたという。これもくらしの皇子が想像した海中の人食い怪物に似ていると思われる。と言っても、これは海での危険に対する人々の共通的な想像および認識と理解してもよかろうが、数多くの先行研究では『竹取物語』と仏教の関係を論じているが、ここで偽渡海譚における描写は仏教との関わりを再検討することも可能だと思われる。

つぎは「龍の頸の玉」を探しに行く大伴御行大納言の実際の渡海譚である。くらしの皇子と異なり、大納言は宝物を自ら入手しようとした。しかしながら、筑紫の方の海に行く途中で、大納言らは海で疾風と大波に遭った。さらに雷も落ちて、船が大波に翻弄され、極めて危険な状態に陥った。大納言は何のすべもできずに、ただ泣きながら楫取の御神に繰り返して祈っただけである。その後、ようやく雷が止み、良い風に乗じて三日後播磨に到着した。

すでに指摘されているように、ここで楫取の御神は住吉大神、船霊神など海道守護の神である。住吉大神は「記紀」に登場する神で、神功皇后が三韓征伐する

時に渡海を助力させたことから、海上守護神としての性格を有している。船霊神は漁船の守護神で、航海安全と豊漁の祈願対象とされている。遣渤海使、遣唐使など遣外使節の航海および渡海の記載に、以上の神に祈ることがしばしば見られる。

渡海譚前後における大納言の態度は逆転されることが対照的とも言える。出港前、大納言は「この国の海山より、龍は下り上るものなり。いかに思ひてか、汝ら難きものと申すべき」と自信満々な態度で、しかも自ら弓を持ち、龍を射殺しようと思っていたが、実際龍の姿も見えずに、海で疾風・大波・雷に遭ったから極めて臆病になり弱音をも吐いた。また、大納言が疾風・大波・雷に遭遇したのは龍に殺意を持っていたことに気づいた後、千度ほど楫取の神に「今より後は、毛の一筋をだに動かしたてまつらじ」という龍を殺さぬ誓詞を發した。海の場合大納言と楫取の身分も逆転される。伊澤美緒氏が述べているように、陸上で絶対者として君臨していた御行を、海上の論理は容赦なく陸上最下層の船人・楫取の、さらに下位へ突き落す。それは頂点に立つ支配者から、底辺の被支配者への劇的な転落である。⁽²⁴⁾つまり、極めて自負心の強く、身の程を知らない大納言の性格が鮮明に表されており、龍を殺そうとすることから毛の一筋も動かぬという逆転された態度は、下位に突き落とす大納言のうろたえる姿を呈している。なかで、龍への畏敬や生命への尊重が強調されており、人間を教化する意図がいささか吟味できると思われる。

以上は虚構と真実二面から見る渡海譚である。くらもちの皇子の渡海譚は偽りとはいえ、実際の渡海経験に基づいて作り上げたものである。しかし、その渡海はあくまでも想像によるもので、できるかぎり多くの要素を使いすぎた結果、かえって大納言が実際に経験した臨場感および緊迫感に満ちた渡海経験に及ばないように感じられる。くらもちの皇子の虚言がばれた後、「一生の恥これに過ぐるはあらじ。女をえずなりぬるのみにあらず、天の下の人の見思はんことの恥かしき事」という恥さらしの気持ちに対して、大納言は実際の渡海経験を持っていたからこそ、「かぐや姫てふ大盗人のやつが、人を殺さんとするなりけり」という、完成できぬ難題を出したかぐや姫への不満を漏らすこととなった。大納言の真実

(24) 伊澤美緒, 『「竹取物語」「竜の頭の珠」難題譚の構造』, 『愛知淑徳大学論集文学部・文学研究科篇』第28号, 2003年, pp1-16。

の渡海経験から、残酷さと恐怖に満ちた渡海に対する平安時代人々の社会的認知が窺える。そして自尊心の高い大納言でさえ渡海からかなりの打撃を受け、臆病となったことが、くらのちの皇子の偽渡海譚と鮮明な対照をなしている。そこから、想像以上を超えた艱難なる真実的な渡海経験、および対照的な二人の性格がわかる。

三、昔話と実話の間——『浜松中納言物語』 および 『とりかへばや物語』を例として

『浜松中納言物語』における渡海譚は巻一と巻三に収められている。唐土の遣日使節として日本に派遣された秦の親王は日本女性の上野の宮の娘との間に一人の女の子をもうけた。秦の親王は娘を連れて帰唐し、渡海する途中で海の龍王に船を留められた。その時、秦の親王は「させまろ」と「うなはし」の渡海の昔話を思い出した。原文は以下である。

また率て渡らむには、させまろといひける者、うなはしといひける人を率て渡りけるに、海の中の竜王のめでて、船をとどめけるにわびて、海の中に暈を敷きて置きてけるのち、女は通ふ例なし。⁽²⁵⁾

させまろの昔話は『とりかへばや物語』巻一にも登場する。それは先帝の第三の御子である吉野の宮にまつわった話である。吉野の宮は豊かな才能を持っていた人で、唐に留学し、そして唐大臣の娘を娶り婿となった。しかし二人の娘を授かった後、妻が亡くなった。その後義父も逝去し、さらに恨みを抱く人から暗殺の危険も迫っていたため、吉野の宮は二人の娘を連れて帰国を決意した。その時、吉野の宮は秦の親王と同じようにさせまろの渡海を思い出した。

この女君たちを見捨てんもいみじくかなしきに、唐土の海になにしようと言ひける人をさせまろが率て渡りけるにえ渡らずなりにけるより、女通はぬ道

(25) 池田利夫校注訳、『新編日本古典文学全集』27『浜松中納言物語』。小学館、2001年、P43。

と聞けど、いかがはせん。⁽²⁶⁾

させまろ伝説の出典について、三つの推測がすでに出されている。まずは両書におけるさせまろの渡海が「共に当時流布せる漢籍の故事によるものとも考へられる」という片寄正義氏の推論である。⁽²⁷⁾ また、『和歌童蒙抄』第三、『袖中抄』第八に引用される逸文「筑前国風土記」の「うちあげ浜」に見える狭手彦（さてひこ）伝説もこれとかなり近い。⁽²⁸⁾ 狭手彦は「記紀」に登場し、大和時代に朝鮮に派遣され、高句麗を討伐する武将である。この伝説によると、狭手彦は渡海する時に、海の神が妾の那古若を慕うので舟をとどまれて、那古若を海の神に献上したという。さらに、藤原清輔の『袋草紙』巻四には『遣唐使大伴佐手磨記』（逸文）を典拠とする大伴佐手磨（さてまろ）が遣唐使として入唐の際に、妻の宇奈刀自が端正美麗の故に海神に奪われた話、および人名がこれと類似する。⁽²⁹⁾ 当時において、させまろの渡海話は人口膾炙していたものとされている。

さらに遡ると、『古事記』中巻景行天皇記に記されている弟橘比売命の入水譚に注目すべきである。倭建命が相武国の国造に騙され、火難を逃れる途中で走水海に辿り着いた際に、大浪で渡海できなくなった。その時、倭建命の後である弟橘比売命は自ら進んで海に身を投じ、「以_二菅置八重・皮置八重・絶置八重_一、敷_二於波上_一而、下_二坐其上_一」⁽³⁰⁾ という菅などの敷物を海面に敷き、その上に座して海に献身した。それによって、倭建命が無事に渡海できた。

この入水は南武蔵地方沿岸部で語られていたものとして倭建命物語に結びつけられる説⁽³¹⁾、海の神に仕える巫女である弟橘比売命の献身は海の神との聖婚で、その怒りを和める手段とする説⁽³²⁾ などがあげられる。大場磐雄氏によると、航海の安全を図るには海原の神に奉斎する必要がある、金物および金物以外の器物の他に、人の体を海中に投供したこともあり、これは「上代祭祀における神霊へ

(26) 石埜敬子校注訳、『新編日本古典文学全集』39『とりかへばや物語』、小学館、2002年、P229。

(27) 片寄正義、「とりかへばや物語の基礎的研究」、『国語と国文学』15（5）、1938年、pp53-82。

(28) 鈴木弘道、「浜松・とりかへばや所載「させまろの伝説」に関する考察」、『国語と国文学』30（7）、1953年、pp24-33。『和歌童蒙抄』では那古若、『袖中抄』では那古君。

(29) 池田利夫校注訳、『新編日本古典文学全集』27『浜松中納言物語』、小学館、2001年、pp42-43、注7。

(30) 山口佳紀等校注、『新編日本古典文学全集』第一巻『古事記』、小学館、1997年、P226。

(31) 和田萃、『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』中、塙書房、1995年、P284。

(32) 守屋俊彦、『ヤマトタケル伝承序説』、和泉書院、1988年、P152。

の献供型式の一」とされている。⁽³³⁾

これを漢籍に求める研究者として、神田秀夫氏、広畑輔雄氏は弟橘比売命の話が『搜神記』巻四「張璞投女」における「妻因以_二璞亡兄孤女_一代_レ之。置_二席水中_一、女坐_二其上_一。船乃得_レ去」⁽³⁴⁾と類似するのを提出した。⁽³⁵⁾ 神田秀夫氏からみれば、この一致が「民族学の応援に求める」が、広畑輔雄氏は「文献交流による現象と言わざるを得ない」と漢籍からの影響を認めている。これを見れば、『史記』「滑稽列伝」にみえる「共粉飾_レ之、如下_レ嫁_レ女床席、令_二女居_二其上_一、浮_中之河中_上」⁽³⁶⁾という女性を入水させ河伯の嫁とし、水害を防ぐ話を思い浮かべる。『史記』のほか、この話は『芸文類聚』巻五十「職官部六」、『蒙求』「西門投巫」にも収録されている。すなわち、人の体を水の神に献上する話は単に一地域に限られたものではないと考えられる。

以上の話は同じく渡海する途中で神に阻止され前進できなくなった際に、女性が海に身を投じることで、神から通行の許可を得ようとするものである。ここで注目されるのは女性が水面に置く敷物に座ることである。『礼記』「楽記」から、祭祀する時に筵席を敷き、その上に祭祀用の酒肉および食物を盛った器を並べる習俗がわかる。⁽³⁷⁾ 記紀には席に関する表現がいくつか見られ、それが宴席だけではなく、身分を象徴する意味合いも持っているのが窺える。⁽³⁸⁾ これを踏まえると、人を水面の敷物に座らせることは、神への供物として献上するという特殊な意図が含まれると思われる。

古代日本では造船技術や航海技術がまだ十分発達しておらず、航行中に風や浪に襲われたり、乃至海に吞まれたりする例が非常に多く見られる。時代的制約で、海中で風や浪に遭遇することは神の怒りと見なされており、その怒りを鎮めるために祭祀が頻繁に行われた。人の身を供物として神に献上する、いわゆる人

(33) 大場磐雄、『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—』、角川書店、1970年、P405、P409。

(34) (東晋) 干宝著、馬銀琴訳注、『搜神記』、中華書局、2012年、P84。

(35) 神田秀夫、「上代説話研究叙説」、『国語と国文学』東京大学国語国文学会編 39(10)、1962年、pp13-24。広畑輔雄、『記紀神話の研究：その成立における中国思想の役割』、風間書房、1977年、P381。

(36) 二十四史精裝版『史記』第十冊、中華書局、2013年、P3211。

(37) 『鋪_二筵席_一、陳_二尊俎_一、列_二籩豆_一、以_二升降_一為_レ礼者、礼之末節也、故有_レ司掌_レ之』。李学勤主編、『礼記正義』、北京大学出版社、1999年、P1118。

(38) 例えば天照大御神が新嘗祭で席に座る場面や、海神が彦火火出見尊を迎えるために八重席を敷く場面、または倭健命が東征する際、熊襲の川上臯師が童女の姿をした倭健命と手を取り合い同席する場面などが挙げられる。

身御供は、神への至高なる敬意を示す行為とされている。ゆえに、人を海に投じるも祭祀の一環で、神への畏怖と敬意を表す行為と見なされていた。それは伝説にとどまらず、実際の歴史上にも見られる話である。『続日本紀』天平宝字七年(763)十月乙亥条には、高内弓が帰国する渡航中、使節の板振鎌束が船上にいた異国の女性三人と、一人の異様な優婆塞を海に投じた記載がまさにその実例である。⁽³⁹⁾

異国との交流や遣外使節が活発であった時代で、海によって離された夫婦や親子の実話が文芸作品として演じられ、さらに加工が重ねられてきた。『とりかへばや物語』におけるさせまろ伝説の直接的な出典は必ずしも『浜松中納言物語』によるとは限らないが⁽⁴⁰⁾、両書におけるさせまろ伝説は、渡海および入水にまつわる昔話と実話が交錯して、それらの記憶が混ざり合うなかで、次第に人々の共通理解として受け入れられ、当時において人口膾炙の典型的な渡海譚となったと考えられる。

四、夢と現実の間

——『浜松中納言物語』および『大鏡』を例として

最後は『浜松中納言物語』および『大鏡』における渡海譚と夢の関係を論じてみたい。

『浜松中納言物語』では秦の親王がさせまろ伝説を思い出して、渡海することに悩んで五年間筑紫に滞在し、やむを得ず海の竜王に祈った。そして祈った験があり、海の竜王は夢で秦の親王の渡海の許可を与えた。原文は以下である。

海の竜王に、多くのことを申しこひける夢に、「早く率て渡れ。これはかの国の后なれば、たひらかに渡りなむ」といふ夢を見て、よろこびつつ、五つといふ年率で渡りて、かぎりなく思ひかしづくに。⁽⁴¹⁾

(39) 青木和夫、稲岡耕二等校注、『新日本古典文学大系』14『続日本紀』巻二十四、岩波書店、1992年、P440。

(40) 鈴木弘道、「浜松・とりかへばや所載「させまろの伝説」に関する考察」、『国語と国文学』30(7)、1953年、pp24-33。

(41) 池田利夫校注訳、『新編日本古典文学全集』27『浜松中納言物語』、小学館、2001年、pp43-44。

このような夢で神と接触して渡海の許可をもらう話は平安時代後期の歴史物語『大鏡』にも見られる。

いかなることにかと、怖れたまひける夢に見えたまひけるやう、いみじうけだかきさましたる男のおはして、「この日の荒れて。日頃ここに経たまふは、おのれがしはべることなり。よろづの社に額のかかりたるに、おのれがもとにしもなきがあしければ、かけむと思ふに、なべての手して書かせむがわろくはべれば、われに書かせたてまつらむと思ふにより、この折ならではいつかはとて、とどめたてまつりたるなり」とのたまふに、「たれとか申す」と問ひ申したまへば、「この浦の三島にはべる翁なり」とのたまふに、夢のうちにもいみじうかしこまり申すと思すに、おどろきたまひて、またさらにもいはず。⁽⁴²⁾

藤原佐理は平安時代で小野道風・藤原行成と並ぶ三跡と呼ばれる能筆家である。正暦二年(991)、大宰大貳の任期が終わり、藤原佐理は上京する途中で伊予国前の港で暴風雨に遭い、進まなかったという状況において、神から社の額を書いてもらいたいと夢を見た。その後、天氣が晴れ渡るようになり、藤原佐理は精進潔斎して社の額を書き上げ、神宮に奉納して無事に帰京した。

竜王は風雨を司る神力を持つとされており、多くの場合において海の竜王は仏教における娑伽羅龍王を指している。これは別紙に触れたので贅言しない。「浦の三島にはべる翁」は三島津見神⁽⁴³⁾を指しており、「記紀」によると、三島津見神が天孫邇邇芸命の後妃、木花佐久夜毘売の父である。また、ここでの神社は『延喜式』神名帳にみえる伊予国越智郡の「大山積神社」で⁽⁴⁴⁾、後は日本全国の三島津見神を祭る神社の総本社となっている。もとより山の神の性格が強いが、神社が瀬戸内海の要衝に位置することで、三島津見神も航海の守護神として信仰を集めている。両書の渡海譚に海の竜王および三島津見神が現れたのは、海の神の性格に関わるのである。

(42) 橋健二、加藤静子校注訳、『新編日本古典文学全集』34『大鏡』。小学館、1996年、P99。

(43) 『古事記』では大山津見神、『日本書紀』では大山祇神。ほかに大山積神の表記があり、俗称は三島明神である。

(44) 藤原時平等撰、正宗敦夫編、『延喜式』第二。日本古典全集刊行会、1929年、P245。

ここで秦の親王と藤原佐理の渡海譚の構成はほぼ共通している。すなわち、まずは渡海中に何らかの障害に当たり航海が中断され、その後神からの夢告げで障害に当たる原因が明らかにされ、最後は問題が解決され、無事に渡海を果たしたことである。その中で、神からの夢告げは問題解決の重要な橋渡しの役割を果たしているとも言える。

以上の両書、ないし平安文学にも夢が数多く登場している。夢は睡眠中に体験される心像や観念のことであり、古代の人々は夢を非常に重要視し、夢を神の意志を伝えるものとして崇められた。夢合わせや夢占いを通じて、それを解釈する試みは古代から現代に至るまでも続いている。夢で神仏と接触するのがよく宗教に取り上げられてきた。『聖書』には神が夢で靈驗を示す場面があり、『クルアーン』でムハンマドが夢で神諭を得た話が登場する。『高僧伝』でも僧侶が夢で神人に会った後奇跡が起こるエピソードは珍しくない。日本で特に仏教説話である『日本霊異記』や『今昔物語集』には夢を通じて神仏と接触する話が多く見られる。当時の人々は神の存在を強く信じていても、その実態は見えないため、現実と幻想の間でバランスを取る夢を媒介として神と接触し、神の靈驗を確認しようと考えられる。夢は精神的活動として、神仏や他界との繋がりや、神仏の意志を伝達する役割が授けられており、夢の真偽を証明できないことがその特性を強めていたと思われる。

しかしながら、神からの夢告げは決して簡単に受け取るものではない。海の竜王からの夢告を得られたのは、秦の親王が現実で「多くのことを申しこひける」の験があったからで、その誠心が海の竜王を感動させた。また、させまる伝説で女性が海の神に奪われ渡海できなかった話と比べると、秦の親王の娘が無事に渡海を果たしたのは、将来の唐の後となる特別な身分を有していたためである。この話により、秦の親王が娘への愛情が垣間見え、娘の特別な身分が強調されるとともに、娘が唐土で活躍する展開への伏線が示されていると考えられる。一方で、藤原佐理が夢で三島津見神と接触したのは、伊予国の大山積神社との位置関係が背景にあると考えられる。藤原佐理が自発的に神仏に祈ったわけではなく、神仏からの夢告げが授けられたことは、能書家として彼の書道が神仏でさえ認められたことを示唆している。この逸話を通じて、藤原佐理の書道に対する自覚と自信がはっきりと示され、神仏からの認めによって側面から彼の優れた書道の腕前が裏付けられ、「おほよそこれにぞ、いとど日本第一の御手のおほえはと

りたまへりし」といった現実で高い評判に達することとなる。神仏からの夢告げは神仏への信仰を一層深めると同時に、渡海譚における人物のイメージを際立たせるとも言えよう。

おわりに

以上では、平安朝物語における渡海譚について、例をあげながら虚構と真実・昔話と実話・夢と現実の三つの様相を説明した。これらの渡海譚は実際の渡海歴史と渡海経験を参照して一見平凡な話として作り上げられたが、その中に映された人物の性格とイメージ、伝承関係、社会信仰など多様な要素が織り込まれる。民族学の視野から見ると、渡海譚は海に対する人類の共通的な認識という一面があるが、その中で含まれる社会・民族の独特的な意識、さらに渡海譚そのものの持つ意義など、解明すべき点が多々あると思われる。鈴木彰氏が指摘しているように、中世以前に著された渡海記を発掘し、文芸としての渡海記を深めていくことが課題となるが、今後は上代や平安文学に見られる渡海譚をさらに発掘し、それに関する課題を進めていきたい。

参考文献

- 片桐洋一校注訳、『新編日本古典文学全集』12『竹取物語』。小学館、1994年。
池田利夫校注訳、『新編日本古典文学全集』27『浜松中納言物語』。小学館、2001年。
石埜敬子校注訳、『新編日本古典文学全集』39『とりかへばや物語』。小学館、2002年。
橘健二、加藤静子校注訳、『新編日本古典文学全集』34『大鏡』。小学館、1996年。
鈴木彰、「渡海記と漂流記——十六世紀以前を中心に」、『東アジア文化講座第一巻はじめに交流ありき 東アジアの文学と異文化交流』。文学通信、2020年、pp35-47。
丁莉、「『竹取物語』に読む古代アジアの文化圏」、『東アジアの文化圏』。笠間書院、2017年、pp28-47。
鈴木弘道、「浜松・とりかへばや所載「させまろの伝説」に関する考察」、『国語と国文学』30(7)、1953年、pp24-33。
入江英弥、「『古事記』弟橘比売命入水譚研究史小考」、『紀要—弘前学院大学文学部』(54)、2018年、pp35-45。